W. J. Hankey, " 'Knowing as We Are Known' in *Confessions* 10 and Other Philosophical, Augustinian and Christian Obedience to the Delphic *Gnothi Seauton* from Socrates to Modernity", *Augustinian Studies*, 34 (2003) 23-48.

上 村 直 樹

アウグスティヌス (= Aug.)『告白録』第 10 巻冒頭の一文 "Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam, sicut et cognitu sum." を結節点として、デルフォイの神託 "Gnothi Seauton" に関する西欧古代から中世にいたる広範な受容史を検討する。はじめに (A)、カルヴァン、エリウゲナ、トマス・アクィナスらの思考における認識論と存在論の一体性によって、自己知と神についての知の結合を探究するシステムが見出される。人間は神との関係における自己認識のもとで生きなければならない。このような枠組みにおいて、彼らは Aug. にその源泉を有し、また、アンセルムスの後継者であると規定される。そして、その二つの知のあいだの関係性が枚挙される (p. 27)。ついで (B)、『告白録』第 10 巻における神に直面する自己検証のプロセスを分析し、終末論的な希望が現実化していることが明らかにされる。この理解によって第 10 巻に先行する巻で提出された諸問題 (p. 33) を解決する方法が確立するとともに、第 11 巻以降の創世記解釈を自己理解の表出であると見なすことが可能になる。さらに、プラトン的な "Gnoti Seauton" の受容史が追跡される。まず (C)、ソクラテスからプロティノスにいたる神託理解の展開がしめされる。ソクラテスは、神的なものが個の善さについて配慮しつつ、人間的なものとの内的な結びつきにおいてあらわれる、という関係を成立させた。これは神的なものと人間的なものとを分離するというそれ以前の関係と比して革新的である。そして、プラトンとアリストテレスがその系譜に位置づけられる。次に (D)、ヤンブリコスからトマスにいたる流れが検討される。後期新プラトン主義者は、学が自己知への道をととのえ、神的な知にいたる自己知のためには学の体系化が求められると考え、神的な知へといたる準備的な道をととのえた。この枠組みのなかに、ボエティウス、アンセルムス、デカルトが組み込まれ、さらに、ボナヴェントゥラとトマスもいれられる。以上のように、デルフォイの神託に服する思考が、古代から中世にいたるまで一貫していることが諒解される。